自分の声を探して

太田　奈名子　'09

今、中高生の皆さんが、時には遅刻しそうになって猛然と駆け抜けたり、時には友達に悩みを打ち明けてゆっくりと歩を進めたりする欅並木を、私も10年ほど前、皆さんと同じように歩いていました。高校2年生の夏に成蹊を離れてから、セントポールズ校への編入、卒業を経て、私は現在、東京大学大学院総合文化研究科の博士後期課程に在籍しており、博士号取得を目指して論文を執筆する日々を送っています。

私が研究している時代は、約70年前、第２次世界大戦に敗れた日本の各地にGHQが進駐した占領期にさかのぼります。GHQが制作していたラジオ番組の現存音源を確認して、ラジオの言葉により日本国民がどのような人々として表現されていたか、また、日本国民自身はラジオでどのような言葉を発していたかを丁寧に聴き、日本占領期という時代を、占領下の人々の視点に立って捉え直すことに挑戦しています。

様々な研究テーマが選択できる大学院で、教科書に載らないような庶民の声になぜ興味を持ったのかを改めて自身に問うてみると、私の研究姿勢の原点には、SPSにおける体験があることに気づかされます。留学当時、私のつたない英語、そして、どの辞書をめくっても言葉にならない胸の内に必死に耳を傾けて下さったのが、SPSの先生方と生徒のみんなでした。丸テーブルで議論が飛び交う教室で、ステンドグラスから差す光が美しいチャペルで、季節の花が色とりどりに咲く湖のほとりで、お菓子を持ち寄り大笑いしながらうんと夜更かしした寮の部屋で、かつて自分がそうしてもらったように、今私も、占領下の日本で埋もれてしまった人々の声に、必死で耳を傾けようとしているところです。

卒業から長い年月が経った今でも、成蹊の、そしてSPSの友人と再会した時には決まって、体の内側から何か温かい気持ちが溢れてきて、満ち足りた感覚に包まれます。それは、彼らの一人ひとりが私の内なる声を見出し、認め、創ってきてくれたからに違いありません。

中高生の皆さん。今日まで70年以上にもわたり繋がれてきた貴重な成蹊・SPS交流の道に続いて、引き返せない、しかしだからこそ掛け替えのない一歩を、ぜひ大きく踏み出してみてください。「一人ひとり、それぞれの人間にしか発することのできない〈自分の声〉を聴きたいんだ」という人たちが、SPSで大勢、笑顔で待ってくれています。そして皆さんもぜひ、「多様性」という言葉一つでは括りきれない、めいめいの国の多彩な文化を運んでくれるSPSの仲間の〈自分の声〉を、見つけ出してあげてください。この声の交流こそが、今日の私を私らしく歩ませてくれる源流であり、異文化交流そのものであると私は考えます。皆さんの体験談を聞ける日を、心待ちにしています。